



大阪ブランド戦略

# 学問所・町人塾が育んだ 大阪人の進取の精神

～今もなお大阪に息づく学問と知識の伝統～

大阪ブランドコミッティ  
学問所・町人塾パネル

## 目次

1. ブランド資源の整理と確認	1
(1) 大阪の進取の精神の支えとなった学問所と町人塾	1
(2) 町人の学問所、懐徳堂	3
① 懐徳堂の成立と発展	3
② 懐徳堂のすぐれた学者、学説	4
(3) 最先端をいく、適塾・先事館	5
① 蘭学(洋学)	5
② 適塾	6
(4) 商人の道、石門心学	7
① 石田梅岩	7
② 心学明誠舎	8
2. PR戦略 学問の伝統をもつ大阪のイメージを発信しよう	9
① Center of Excellenceとしての大阪の歴史	9
② 発信戦略	10
3. 参考資料	12
(1) 写真資料	12
(2) 参考文献	13
4. パネルメンバー	13
【参考】 大阪ブランド戦略について	14

## 1 ブランド資源の整理と確認

### (1)大阪の進取の精神の支えとなった学問所と町人塾

大阪は、その長い歴史のなかで、都市としての性格を何度か大きく変えている。

古代では幾たびか首都であり、中世には水陸の交通の要衝であった。戦国時代には蓮如の大坂本願寺建立にともない寺内町すなわち宗教都市として発展し、天正11年（1583）秀吉の大坂城築造により、日本一の軍事都市、城下町に姿を変えた。

そして、1615年の元和偃武以降、大坂は徳川幕府の方針により、経済都市としての発展が方向付けられた。

大坂は江戸時代に、天下の台所と呼ばれる大経済都市に成長した。

大阪湾に面した港には諸国の船が出入りし、淀川は京の都へ、大和川は大和の地へと連なっていた。市内には縦横に水路が通い、この交通の便が繁栄の源であった。

また銅の精錬、菜種油や綿実油の製造、綿と木綿の生産、酒造業、薬種、造船など先進工業都市の顔を持つとともに、堂島米市場や両替商に代表される商業、金融の一大中心地でもあった。

大坂の市内地域ともいえる大坂三郷の町人の人口も、17世紀末の寛文5年（1665）には27万人であったのが、18世紀中ごろの宝暦9年（1759）には41万人を超えている。ほかに武士階級が約8000人いたという。領主を持たない大坂では、武士階級とは、大坂城や東西奉行所そして諸藩の蔵屋敷勤務の武士とその家族であり、常に異動（転勤）する人達であった。大坂の40万余の人口の、98パーセントが町人で、まさに商人の町であった。

中之島に多く設置された全国諸藩の蔵屋敷も、幕末の天保6年（1835）には111か所を数えた。諸藩から大坂へ送った廻米高も、19世紀初めの文政年間には99藩から192万石に達し、そのほか蔵屋敷を経由しない納屋米が蔵米の四分の一ほどあったといわれている。

諸藩の蔵米や国産物を販売する町人の蔵元や掛屋、そして金融機関とも云うべき両替商は徐々に力をつけ、大名貸を行っていた天王寺屋や鴻池、住友などの豪商は巨万の富を築いた。

まさしく、幕末の大坂の儒者広瀬旭窓がその著書「九桂草堂随筆」のなかで「天下の貨、七分は浪華にあり、浪華の貨、七分は舟中にあり」といった賑わいぶりであったのである。

しかし、大坂の商人は経済力をつけながらも、士農工商という封建的身分制度の下位に置かれ、武家政権である幕府から、さまざまな名目で上納金を取られていた。

大坂三郷の町人は将軍家光のとき、地子免除という特権は得ていたが、株仲間の結成を

許される代わりに冥加金等が課せられていた。

またしばしば、御用金という幕府の強制的要請による借金の納付も課せられた。大坂町奉行が大坂市中の多数の町人に初めて御用金を命じたのは、宝暦11年（1761）のことで、そのときには、鴻池善右衛門や越後屋（三井）八郎右衛門など10人が5万両ずつ、合計205人に170万3000両の御用金が申し渡された。その後も御用金は続き、最後は第2次長州戦争の慶応2年（1866）に、178万7800両が命じられた。1両を10万円として換算すると、5万両は50億円、170万両は現在の1700億円にあたる。江戸時代の大坂町人の経済的実力の大きさとその収奪のされ方には、目をみはるものがある。

大坂商人は、当時の社会的地位では下位におかれつつ経済活動を行い、その上、その蓄積を支配階層の武士階級に吸い上げられていた。そうしたなかで彼らは、自らの存在価値を確認し、商業活動の正当性を確立する必要があった。そのためにも大坂商人は自分たちの学問を発展させ、独自性をもつすぐれた学問を創り上げた。

懐徳堂<sup>かいとくどう</sup>は享保9年（1724）に創建され、明治2年（1869）に閉鎖されるまで大坂町人の教育機関として存続した幕府公許の学問所である。そこでは朱子学を中心とした儒学の知の巨人たちが大坂の学問を天下一流のものとしていた。のみならず、懐徳堂では国家体制の改革への試案や金融財政論が研究され、また人体解剖の見学や顕微鏡による観察など、実証的精神をもつ洋学への取り組みもなされていた。

幕末期には大坂の洋学は大きく進展したが、その核となったのは天保9年（1838）に緒方洪庵<sup>こうあん</sup>が開設した適塾<sup>てきじゆく</sup>である。医学と蘭学の塾であったが、洪庵自身が、当今必要の西洋学者の育成に邁進したい、と述べているように、西欧列強の進出という危機的状況に対応し、その西欧の文明・技術を吸収して、わが国の立ち遅れを取り戻す有為な人材の養成に力を注いでいた。この塾は、大村益次郎や福沢諭吉など、維新から明治期にかけてのすぐれた指導者を輩出したことで知られている。

また庶民の教育機関としては、実用的な手習いやそろばん、さらには銭相場や米相場など商業実践まで教える多くの寺子屋や塾があったが、石田梅岩<sup>ばいがん</sup>が説いた石門心学<sup>せきもんしんがく</sup>が18世紀末の天明期以降、大坂に広く普及した。心学明誠舎<sup>めいせいしや</sup>をはじめとする、大坂心学の七舎と呼ばれる塾があり、大坂商人道の確立と商業経済の理論形成に大きな役割を果たした。なかでも売利の正当化は梅岩のキーワードであり、商人の利益は武士の世襲的な俸禄と同じ、と言い切っている。また、梅岩は享保期にすでに、市場価格の存在を確認し、富の源となる労働について分析している。アダム・スミスの「国富論」より40年も前に、市場価格の成立や労働の付加価値を、いち早く発見していたのである。

以下この有名な三つの学問所や塾、そしてその周辺の文化や学問の動きについて、それらが、いかに大坂の人々にとって経済活動や社会の発展のため実用に益するものであったかだけでなく、都市のイメージを高め、大坂町人の精神的な支えとなって来たかについて記述する。

大阪にはすぐれた文化と学問の歴史がある。大阪人のパワー溢れる学問所と塾を訪ね、近世大阪の基盤を築いた先人の足跡をたどることで、明日の大阪ブランド力につなげたい。

## (2)町人の学問所、懐徳堂

### ① 懐徳堂の成立と発展

大坂町人の子弟も為政者なみの儒学的教養を身につけることのできる教育機関を作ろうと、五同志と呼ばれる大坂の5人の富裕町人が費用を出し合い、そのころ設立された塾の一つとして、懐徳堂は創設された。

享保9年(1724)、五同志の一人富永芳春<sup>ほうしゅん</sup>、またの名を道明寺屋吉左衛門の隠居所跡である船場尼崎町1丁目の地に、朱子学者の三宅石庵<sup>せきあん</sup>(1665-1730)を学主に仰ぎ、五井蘭洲<sup>らんしゅう</sup>(1697-1762)が助教に、中井鰲庵<sup>しゅうあん</sup>(1693-1758)が学問所預り人に就任した。

蘭洲は懐徳堂の知的な方向性を定めた学者であり思想家であった。彼は、商人の学校には真に知的なものの追求は必要ないという安易な折衷主義を排し、一貫した哲学的基礎を大切にす、本当の意味での学問的指導が行われるよう、方向付けを行った。

もちろん高度な講義ばかりではなく、地域の児童のための初歩の読み書きや計算も教えられ、朝8時から夜7時まで授業が行われたという。

しかし懐徳堂を他の学問所や塾からはっきり分ける相違点は、商人世界に道徳的認識を与えるという使命感を持ち続けたことである。

それを実現するため、鰲庵らは幕府に対して、大坂の商人層を教育する事業の承認を求め、創設2年後の享保11年(1726)に許可されている。懐徳堂は私的な学校から公的な学問所へと再出発したのである。懐徳堂には幕府から用地として土地が与えられ、種々の税も免除された。こうした動きには、江戸の儒者林羅山の設立した私塾弘文館が、幕府の援助を受け昌平坂学問所へと成長したことが参考となったに違いない。ちなみに昌平坂学問所が老中松平定信の学制振興策により、幕府直轄の官立学問所となったのは、のちの寛政9年(1797)のことである。

官許後最初の講義で、石庵は78人の指導的商人達を前に学問所の基本的哲学を述べた。題して「官許学問所懐徳堂講義<sup>らんもつ しゅしゅう</sup> 論孟首章講義」。ここで彼は「論語」では、道徳的な知識を学ぶ目的は人の道を理解することにあると述べていると説き、「論語」を読み解く鍵として「孟子」のなかに、正義の概念に基づく行為の理論があると説明した。正義の概念と人間の欲望すなわち利を求める情念とを哲学的に対比させ、「利は義なり」と結論づけた。

商行為によって獲得された生計は、社会の他の職業集団、それが武士であれ農民であれ学者であれ、彼らの努力によって得られた生計となら異なるものではない。商人の行動は、社会の他の成員のそれと同様に「正義」によって評価されなければならないと講じたのである。

江戸時代の一般的な道徳哲学では、商人は社会秩序の下位に位置づけられ、商行為の正当性は理論化されていなかった。そうした中で懐徳堂の学問的追求の方向は、制定された規則にも表れていた。学校のなかでは、いかなる人間も講義への出席は差別されなかった。また商人は商売上の急務のため講義中に退出することもできた。

## ② 懐徳堂のすぐれた学者、学説

次に懐徳堂の代表的な学者たちがどのような学説を展開したかを紹介しよう。

二代目学主塾庵の長男であり四代目学主を継いだ中井竹山(1730-1804)は、その弟中井履軒(1732-1817)とともに懐徳堂を代表する学者となった。竹山は老中松平定信に経世済民の著作「草茅危言」を献じたことで有名である。草茅とは民間、危言には正論の意味を持たせている。

「草茅危言」のなかで竹山は、国家制度の改革を大胆に提言している。参勤交代制度の軽減、武士の世襲的特権としての俸禄制度の廃止、公的な高等教育と初等教育のための学校を全国的に建設すること、また教師は身分でなく実力で選ばれ、それに免許を与えることなどである。また貨幣制度の整備についても述べているが、この竹山の貨幣論を、より発展させたのは懐徳堂に学んだ草間直方であった。

草間直方(1753-1831)は、図版入りの日本の貨幣史「三貨図彙」を著し、貨幣論と国家財政論を展開した。これは明治初年に日本の経済構造を根本的に再編成する際、大蔵省に基本的な文献として採用されたものである。直方は商家に生まれ、大坂の両替商鴻池の丁稚として商売の道に入った。のち両替商と大名貸しの担当として大きな功績をあげ、正式に主家の養子となり、鴻池伊助と名乗った商人学者であった。

富永仲基(1715-46)は「出定後語」や「翁の文」で、聖典といわれる古典的な文献をとりあげ、権威然とした仏教や儒教、神道をも厳しく批判している。そして善であるとは日々の生業からなる現実の世界で当たり前なことをなすことであり、他人に対し同情心をもって接し、自分をしっかりと保つことであると説いた。五同志の一人富永芳春の息子であり、早世の天才である仲基の思想は、のち国学の本居宣長や平田篤胤に影響を与えている。

山片蟠桃(1748-1821)は「夢の代」で知られている。これは天文、地理、神代、歴史、制度、経済等を論じ、宇宙や地動説の肯定、神代への批判、唯物論による無神論など、当時としては破天荒な開明的思考と科学的合理精神に満ちた大著である。彼は懐徳堂で学ぶとともに、大坂の誇る天文暦学者麻田剛立からヨーロッパ最新の天文学を学んでいたのである。なお懐徳堂では大儒中井履軒ですら「越俎弄筆」で人体解剖の観察を記述するなど、洋学をも研究する伝統があった。蟠桃という号は商家の番頭の音にちなみ、商人としては

仙台藩の財政再建に成功したことで有名である。

現在、大阪府は毎年、日本文化を世界に紹介している海外の文化人に、その名を冠した「山片蟠桃賞」を贈り、蟠桃の功績を顕彰している。

このように優れた学者を擁する懐徳堂には、全国から武士階級をふくめ多くの学生が集まり、名のある学者も大勢が訪れた。大坂は経済都市であるだけでなく、学問の都としても大いに栄えていたのである。

### (3)最先端をいく、適塾・先事館

緒方洪庵(1810-63)が、天保9年(1838)大坂瓦町で医業を営むかたわら蘭学塾を開設した。塾主の号から適々斎塾、略して適々塾または適塾という。これはまもなく手狭になり、弘化2年(1845)に現在地に移転した。この大阪府中央区北浜3丁目の学塾と旧宅は「緒方洪庵旧宅及塾址」として史跡、重要文化財に指定されている。

#### ① 蘭学(洋学)

洪庵の適塾は明治維新に活躍した多くの人材を出した医学校兼蘭学塾として名高いが、その前史として、大坂では18世紀中ごろから洋学が盛んに行われるようになっていたことが注目に値する。

それは享保の改革を断行した八代将軍吉宗によるものである。例えば暦の改正の問題に積極的に取り組み、ヨーロッパの天文学を取り入れている中国天文書の輸入を大幅に解禁したことにより、最新の理論や科学的思考法がわが国に伝えられた。

大坂で洋学への道を切り開いたのは麻田剛立(1734-1799)である。彼は元来は医者であったが独学で天文暦術の研究を進め、懐徳堂の中井竹山と履軒兄弟の世話で、先事館という医学と天文学の塾を開いた。ここで剛立は、山方蟠桃や高橋至時、間重富らの弟子を教育した。

高橋至時は、大坂定番同心という大坂城京橋口に勤務する下級武士。間重富は、富裕な質屋の主人であった。だが、この二人の優れた天文学者は、幕府の暦の大改革事業にあたり江戸に招かれ、「寛政の新暦」を作成した。また伊能忠敬の日本全国測量を指導したことも知られている。

橋本宗吉(1763-1836)は、間重富らがオランダ語の専門家を養成する目的で勉強させた、もと傘屋の紋描き職人である。宗吉は江戸の大槻玄沢に学び、4か月間に4万語のオランダ語を暗記したという。宗吉は大坂に帰ると蘭学塾の絲漢堂を開いた。この塾からは、中天游らが出た。

中天游(1783-1835)は、思々斎塾という蘭学塾を開き、緒方洪庵などの弟子を育てた。ここで洪庵は医学だけでなく、志筑忠雄の著作として知られる「曆象新書」の原書なども学

んでいる。志築忠雄は長崎通詞出身の蘭学者・天文学者で、ニュートンの力学やケプラーの法則などを紹介した。またドイツの博物学者で長崎のオランダ商館の医師であったケンペルの著書「日本誌」を訳し、「鎖国」という言葉を初めて使ったことでも有名である。 洪庵はこうして西洋医学に加え、幅広い洋学知識を身につけた。

## ② 適塾

洪庵は適塾で、原書による研究と翻訳を通して、西洋医学の導入に力を注いだ。「人身窮理学小解」は生理学書の翻訳。「和蘭詞解略説」はオランダ語の文法書。「扶氏<sup>ふし</sup>経験遺訓」はドイツの名医フーフランド(1762-1836)の医学書の蘭訳書の翻訳で、本篇25巻、薬方篇2巻、付録3巻という大部なものである。

適塾の塾生には、全国から多くの英才が集まった。その入門帳である「姓名録」には天保15年(1844)正月から、洪庵が幕府の奥医師に任ぜられて江戸に移った文久2年(1862)までに、612人の名が書かれているが、適塾全体の塾生は1000人に達するのではないかとされている。

適塾では、新入塾生にまずオランダ語の文法や文章論を学ばせ、この教程を終えると月に6回ある原書の会読に進ませた。福沢諭吉の「福翁自伝」によると、会読では塾生を7、8級にクラス分けし、各級ごとに、塾生たちが順番に原書を読み解き質疑と討論を行っていた。各級第1番の上席を3か月占めていれば登級する規則なので、毎月6回試験があるようなものであったという。学生間の競争意識に刺激を与えたのである。適塾には、ゾーフ・ハルマという蘭和辞典の写しが1部あり、その辞典の置かれた、三畳ほどの部屋を、ゾーフ部屋と呼んだ。ゾーフ部屋には徹夜の燈火を見ざる夜ぞなかりし、とある。

化学実験も自分たちで工夫し、その材料の化学薬品も自作したという。新しく輸入された物理や電気の原書も、塾生たちがいち早く共同で翻訳していた。

江戸の書生が大坂に勉強に来ることはあっても、江戸に学びに行くことはなかった。大坂から江戸に行くのは教えに行くときであったという。

西洋の書を読むことは日本国中の人にはできないが、自分たちの仲間だけはできる、そうした気位であった。どうしたら金が手に入るかなど考えていては、決して真の勉強はできなかったであろう、と「福翁自伝」にある。

これはまさに学問の本質であり、同時に教育の原点でもある。そしてさらには、学問を手段として視がちな現代の風潮への痛烈な批判となっている。

長与専齋<sup>ながよせんさい</sup>は、その著「松香私志」で、適塾は元来は医学校であったが、その実はオランダ語解読の研究所で、学生は医者に限らず兵法家あり、砲術家あり、博物学者も化学者も、およそ蘭学を志すほどの人は皆この塾に入って勉強した、と述べている。

こうした中から、大村益次郎、福沢諭吉、佐野常民、箕作秋坪<sup>みづくりしゅうへい</sup>、橋本左内、大鳥圭介、長与専齋、高松凌雲<sup>りょううん</sup>など、幕末から明治にかけて各方面で活躍し、混乱する明治時代の舵をとり、近代日本形成の担い手となった人材が輩出したのである。

医者としての洪庵の功績のひとつに、除痘館の設立という種痘普及事業の展開がある。嘉永2年（1849）に開設された除痘館は、幕府直轄地では全国にさきがけて安政5年（1858）に官許を得、さらに明治新政府に引き継がれた。この種痘普及事業は、新しい西洋医学が一般庶民にひろがる大きな契機となった。

医学校としての適塾の流れは、大阪大学医学部・医学系研究科および附属病院に続いている。史跡適塾の家屋と土地は、昭和16年（1941）に国の史跡指定となったことを機会に、翌年大阪大学へ寄贈された。緒方洪庵と塾生たちの、学問と社会の進歩に寄せた情熱はいまも大阪の地に脈々と受け継がれているのである。

## (4)商人の道、石門心学

### ① 石田梅岩

石田梅岩(1685-1744)が、商人としての生活体験に、儒教・仏教・神道の諸説を取り入れ、京都車屋町御池上ルの自宅に講席を設けて、商業道徳の実践を説き始めたのは、享保14年（1729）のことであった。大阪で懐徳堂が創設された5年後のことである。

享保期は幕政改革が実施された政治面での変革期であったが、同時に町人階層の価値意識の大きな転換期でもあった。町人たちの生活理念に、石門心学の果たした役割は大きい。

梅岩は、<sup>じょうきょう</sup>享2年（1685）現在の亀岡市に農家の次男として生まれ、11歳のとき、呉服商に丁稚奉公に出た。そのくらしのなかで、人の寝静まるのを待つて多くの書物を読み、人の道を求め続けた。その思索と体験を基に、師の小栗了雲の教えを受け、やがて悟りの境地に至ったという。梅岩はその心境を京都の町人や多くの人々に伝えることに、自らの使命を見出すに至った。44歳のとき心学の講座を開き、54歳のときに教義の要点をまとめて「<sup>とひもんどう</sup>都鄙問答」を刊行した。

その中には、近世町人思想の精髓ともいえる考えが述べられている。まず、武士が俸禄を得ると同様に、商人が正当な利益をあげることは道理にかなったことであると説いた。しかし、商人の基本的な天職は社会に仕えることであり、他のすべてを犠牲にして利益を最大限に増やすことだとは考えなかった。まことの商人は、先も立ち我も立つことを思うなり、と企業倫理や企業の社会的責任についても言及している。また近世商家の経営信条である始末・才覚・算用のうち、始末が特に重要であり、儉約を守ってコスト・ダウンを心掛けるべきものとしている。

その商人道は土農工の道と同じであり、天に二つの道有らんや、と言い切っている。これは商人に自信と自覚を与えるものであった。

売物は時の相場により、<sup>もんめ</sup>百目に買ったる物を九十目ならでは売れざることあり……天下の御定の物の外は時々にくるいあり。狂いあるは常なり、とあるのは、アダム・スミスの

「富国論」よりも約40年も前に、市場価格の成立を発見していたことを示している。

またスミスは、富の源泉は労働にあり、と言っているが、その労働付加価値の形成過程の分析はしていない。ところが梅岩は、客の満足の度合いを、商品の品質、サービス、コストに分け、働く人の労働の違いによる、富の生まれる過程をとらえている。これは、梅岩の商人としての実践から生まれた経済理論であった。

梅岩の講義を受けるのは無料であり、聴講希望の者を差別しなかった。そのうえ男女の席は区別するが、女性にも講義を開放したことはまさに画期的なことであった。はじめは数人の聴衆だけであったが、数年の間に、梅岩を師と仰ぐ商人達による弟子グループができあがり、梅岩を助けた。梅岩自身もその中からすぐれた後継者を育成していった。

梅岩の後を継いで、2代目の石門心学の盟主となったのが、手島堵庵<sup>てじまとあん</sup>であった。梅岩門下の最年少グループの一人であったが、後年講席を組織化し、天明・寛政期には、ほとんど日本全国に普及する石門心学の基礎を築いたのである。

梅岩は生前、本拠地の京都ばかりでなく、商都大坂においても度々講席を開いていた。そして没後、大坂の弟子達によって、天明・寛政期に5舎、文政・弘化期に2舎の心学塾が開設された。その中のひとつが明誠舎<sup>めいせいしや</sup>である。

## ② 心学明誠舎

天明5年(1785)に、井上宗甫<sup>そうほ</sup>またの名は三木屋太兵衛が心斎橋筋銚屋町<sup>かざりや</sup>(中央区)の居宅に講席を設け、明誠舎と名づけた。この舎号は手島堵庵が「中庸」のなかの、自明誠謂之教、からとったものと伝えられている。

天明5年に定められた「連中定書」<sup>れんじゅうさだめがき</sup>には15か条の定めがあり、定例集会の際にこれを読み上げて自戒としたという。

①法令の遵守、②神仏の崇敬、③主人から奉公人への慈愛、④奉公人から主人への献身、⑤親類との交際、⑥儉約の励行、⑦親の子への慈愛、⑧親孝行と家業への精励、⑨兄弟愛、⑩夫婦愛、⑪人間関係における信義、⑫言動に現れる恭敬の精神、⑬過失に対する諫言、⑭過失への反省と諫言の受容、⑮食欲を慎む。

この内容はまさしく当時の大坂商人の経営理念を示すものであり、商家の家訓の原型ともいえるものである。

天保期の頃から、石門心学は衰退期に入ったと見られているが、大阪の心学は、むしろ活気を呈した面があった。それは柴田鳩翁<sup>きゅうおう</sup>、奥田頼杖<sup>らいじょう</sup>らが来坂し、大坂の明誠舎などで講じ、また大坂の熱心な心学者が他の地方にも進出して教化活動に専念したからである。

京都の柴田鳩翁は文政10年(1827)から天保9年(1838)の間ほとんど毎年、長い間は2、3か月間も大坂に滞在して心学道話をを行った。鳩翁の話術は絶妙で、各地で好評を博した。その説得力豊かな、実践哲学としての道話を集大成した「鳩翁道話」は当時のベストセラーとなり、今日に至るまで読み継がれている。

明治維新の変革によって、全国各地の心学講舎は廃絶の危機を迎えた。大阪の明誠舎も

その例外ではなかった。そのなかで明誠舎の再建に大きな貢献をしたのは、維新直後から活躍した岡本孝道と、明治後期から大正期にかけて石門心学の再発見に尽力した山田俊卿であった。山田は医業のかたわら、明誠舎の再建に力を注ぎ、新しい社会教育を精力的に展開していった。舎中は、新時代にふさわしい法的組織に切り換えることを決議し、明治38年（1905）社団法人心学明誠舎が誕生した。

明治・大正・昭和と活動は続けられた。戦後においても、心学明誠舎に力を注いだ近畿大学教授竹中靖一に対し、ミネルバ書房より刊行した「石門心学の経済思想」により、昭和39年度日本学士院賞が授与されている。

近年、社団法人心学明誠舎は、事務局を発祥の地に近い中央区本町3-5-2辰野（株）内に置き、活動を続けている。

商人道、ひいては人としての道を示した石門心学は、270年の時を経た現代においても、商売のありかたや企業の社会的責任、さらに人間の倫理の基本を考える上で、大きな指針となっているのである。大阪に受け継がれた石門心学の伝統を、さらに世に広めたい。

## 2 PR戦略

### 学問の伝統をもつ大阪のイメージを発信しよう

#### (1) Center of Excellence としての大阪の歴史

天明8年（1788）の初夏、前の年に老中筆頭となっていた31歳の松平定信は、京都への公式訪問の途上で、当時59歳の中井竹山を大坂城に招き、国家制度の改革についての見解を問い、竹山の意見は翌年寛政元年（1789）「草茅危言」として献じられた。

竹山をはじめとする世にすぐれた学者を擁していた懐徳堂には、全国から多くの学者がしばしば訪れていた。伊藤東涯、古賀精里、柴野栗山、尾藤二洲、佐藤一斎、等々である。

また懐徳堂と関係の深い木村兼葭堂(1736-1802)もまた、内外に名を知られ、多くの人を集めていた町人学者である。兼葭堂は、酒造家としての名は坪井屋吉右衛門、画家、博物学者として、その収集物は世に聞こえていた。鳥、貝、石、植物などの標本を収集整理し、オランダ渡来の動物ユニコーンを論じた「一角纂考」という著書までである。

文政8年（1825）、藤沢東咳が、現在の中央区淡路町1丁目を開いた泊園書院は、もとは荻生徂徠の学統から出発したが、和漢の学を総合した独自の学風を立てたことで、名の高い私塾であった。

当時の人士にとって大坂へ行くことは、優れた学問に接し、新しい知識を吸収できる得

がたい機会を持つことであった。

幕末の時期に社会から最も求められた洋学の最先端の学校もまた、大坂の適塾であった。この適塾に学んだ学生の出身地も全国に及んでいる。日本全国から大坂の学問に憧れて集まったのである。明治維新の軍司令官として活躍した大村益次郎は長州出身、慶応義塾を創設した福沢諭吉は中津藩士であるが大坂生まれ、伯爵となり日本赤十字社を作った佐野常民は佐賀藩の藩医、国事に奔走し安政の大獄に倒れた橋本左内は福井藩の藩医、医事行政と公衆衛生の基礎を作った長与専斎は長崎の出身である。

学生だけでなく先生たちも全国から集まっていた。中井齋庵は播州竜野の出身であり、麻田剛立は豊後の国の儒者、緒方洪庵は備中の足守藩士の子供である。

このように、あちこちから人々が集まり、大阪の学校で学んで力をつけ、その後存分に活躍する、チャンス発見都市の伝統が大阪にはあったのである。適塾の伝統を受け継ぐ大阪大学は、最先端の学問への挑戦を続けてきたことで知られている。

ところが一時期、法律の規制などにより、大阪の市内にあった大学の校舎は郊外へ移転させられた。街中から若い学生の姿が消えた大阪は、急速に学問の香りを失ってしまった。最近法律が改正され、市内の各所に大学のサテライト施設や大学院の教室が設置されるようになってきた。

そして近年、特にバイオ研究やロボット工学の分野などで、大阪が最先端に行くことがマスコミで報道されるようになり、大阪の住民は自らの地域を、誇りをもって見ることができるようになってきた。現在進められている彩都や梅田北ヤードの再開発は、トップの学問と地域開発が一体となった大阪再生の先端である。

## (2)発信戦略

今後どうすれば、大阪の学問の伝統を世に伝え、また大阪の学問の力で人々を引きつけることができるかであるが、まず第一に、現在大阪で行われている学問が社会の役に立つ先端の学問であることがその要件である。そして第二に、大阪にはすぐれた学問の伝統があることを、あらゆる機会をとらえPRすることである。

幸いなことに、懐徳堂の資料も適塾の資料も、いま大阪大学に保存されている。そして大学のホームページにも記載されている。これはIT時代に効果的なツールである。

また適塾の建物は昭和16年に国の史跡として指定され、昭和39年には重要文化財となっている。昭和51年から5年間をかけて文化庁による解体修理が行われ、これを機に広く一般に公開されることになった。さらに適塾周辺は史跡公園として整備され、建物の東西には緑地公園も作られ、西側の緑地には読書する緒方洪庵の銅像が座している。

こうした史跡を、全国から修学旅行や遠足の児童生徒が訪れるようになれば、その認知効果は大きい。修学旅行生に適塾を見学させる運動を起こすと、それ自身がニュースとな

り、大阪の学問の伝統を世に広く知らせることになる。

また懐徳堂跡は現在、ビルの壁面に一枚の碑があるだけであるが、これに関しても、かつての校舎を復元し、資料を展示するなどすることが効果的である。

蘭学者の橋本宗吉は、大坂でエレキテルの実験をしたことでも有名である。そうした大坂の学問を発展させた先達の業績を顕彰する展示館も作りたい。

大阪に旅をして、学問の香りと世を切り開いた若者の息吹に触れよう、という流れを生み出したいものである。

札幌に行くと、北大のポプラ並木を歩きクラーク先生の銅像を仰ぎ見て、ロマンを感じるように、大阪では、買い物を楽しみ、おいしい料理を味わうだけでなく、先人の学問の業績と現代の最新技術や研究に触れる機会が持てるようにしたい。

大阪は集客観光都市を標榜している。すぐれた観光資源として、大阪の学問の歴史を再開発しようではないか。

石門心学をいまに伝える心学明誠舎は、現在も勉強会や講演会など、活発な活動を続けており、企業の経営者や教育学者などの応援者も多い。

企業の日常の経営に役立ち、また心を磨くことを教えた石門心学。大阪はその石門心学のメッカであることを、マスコミ等と協調しながら、世に知らしめたい。経営学の知恵だけでなく、いまの社会に一番欠けている、思いやり、正直、儉約、人間関係における信義など、石門心学の教えには不易のものがある。

ロボットやバイオなど先端技術の動向に触れることができ、適塾や懐徳堂跡など、学問の史跡を見学し、さらに経営のヒントとなり心の糧ともなる石門心学の講義を聴くこともできる街、そうした知のまち大阪を作りあげようではないか。

### 3 参考資料

#### (1) 写真資料



懐徳堂の跡の碑 中央区今橋3丁目  
日本生命ビル南側壁面



緒方洪庵旧宅および適塾 中央区北浜3丁目



除痘館の跡の碑  
中央区今橋3丁目 緒方病院前壁



緒方洪庵の座像 適塾を背に



心学明誠舎の跡の碑  
中央区島之内1丁目（塚筋沿い）



石田梅岩画像

## (2)参考文献

- 新修大阪市史 第3巻3章5節 作道洋太郎 発行大阪市  
5章1節 水田紀久
- 新修大阪市史 第4巻2章7節 作道洋太郎 発行大阪市  
2章7節 水田紀久  
3章5節 阿部武司  
4章2節 浅井允晶
- 大阪市の歴史 大阪市史編纂所編 発行大阪市  
懐徳堂－18世紀日本の「徳」の諸相－ 岩波書店  
テツオ・ナジタ著 子安宣邦訳
- 適塾の研究 百瀬明治 PHP研究所  
福翁自伝 福沢諭吉 岩波文庫  
企業倫理とは何か－石田梅岩の学ぶCSRの精神－  
平田雅彦 PHP新書
- なにわ大阪再発見第7号より 石門心学の創始と心学明誠舎の活動  
作道洋太郎 発行大阪21世紀協会
- 大阪春秋 No.117 特集おおさかの私塾 新風書房  
明誠舎沿革略（第二百回例会記念） 発行社団法人心学明誠舎  
「石門心学」活動の現在－生涯学習としての心学明誠舎活動小史－  
京都大学生涯学習・図書館情報学研究 2004年第3号  
中尾敦子

## 4 パネルメンバー(※敬称略)

- |                  |          |
|------------------|----------|
| 財団法人大阪21世紀協会理事長  | 堀井良殷     |
| 大阪市立大阪歴史博物館館長    | 脇田 修     |
| 大阪大学適塾記念会評議員     | 米田該典     |
| 社団法人心学明誠舎理事、事務局長 | 中尾敦子     |
| 理事               | 大塚 融     |
|                  | 松本優子（執筆） |

## 【参考】大阪ブランド戦略について

### 大阪ブランドコミッティの設立趣旨～大阪に吹く新しい風 Brand-New Osaka～

#### ■都市ブランドの重要性

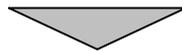
- ・発展する世界の都市には、すばらしい都市イメージ、ブランドが存在
- ・ブランド力を喪失すれば、都市は衰退

#### ■大阪ブランドの危機

- ・大阪は、かつて「天下の台所」「上方」という卓越したブランド力を誇る
- ・最近の大阪は、マイナスイメージ、アンチブランドのイメージ

#### ■豊富なブランド資源

- ・大阪は、食文化、伝統芸能、歴史、伝統、文化遺産を豊富に有する
- ・優れた中小企業の集積。バイオ、ナノテク、ロボットなどの先端科学技術
- ・音楽界、芸能界、スポーツ界、経済界、学会など多方面に人材を輩出



大阪の再生に向けて  
大阪ブランド戦略の推進・大阪ブランドコミッティの発足

### 大阪ブランド戦略の概要

#### 「大阪ブランド戦略」の意味

大阪という言葉から連想される良いイメージ(ブランド＝都市魅力)を回復、向上、確立し、情報発信する活動。(大阪が自信と誇りを取り戻し、新たな発展に向かう気概を内外にアピールする運動)

#### 目的

大阪ブランド戦略の目的は、「大阪の再生」。  
新たな大阪のイメージ<Brand-New Osaka>を創出、定着させ、人、もの、資金、情報、企業を呼び込むことで、「大阪の再生」を目指す。

#### 活動内容

##### ■大阪を知る

大阪の魅力をアピールできる歴史・伝統・文化遺産、優れた技術・企業・人材などを「ブランド資源」(大阪の強み)として発掘又は再評価する活動。

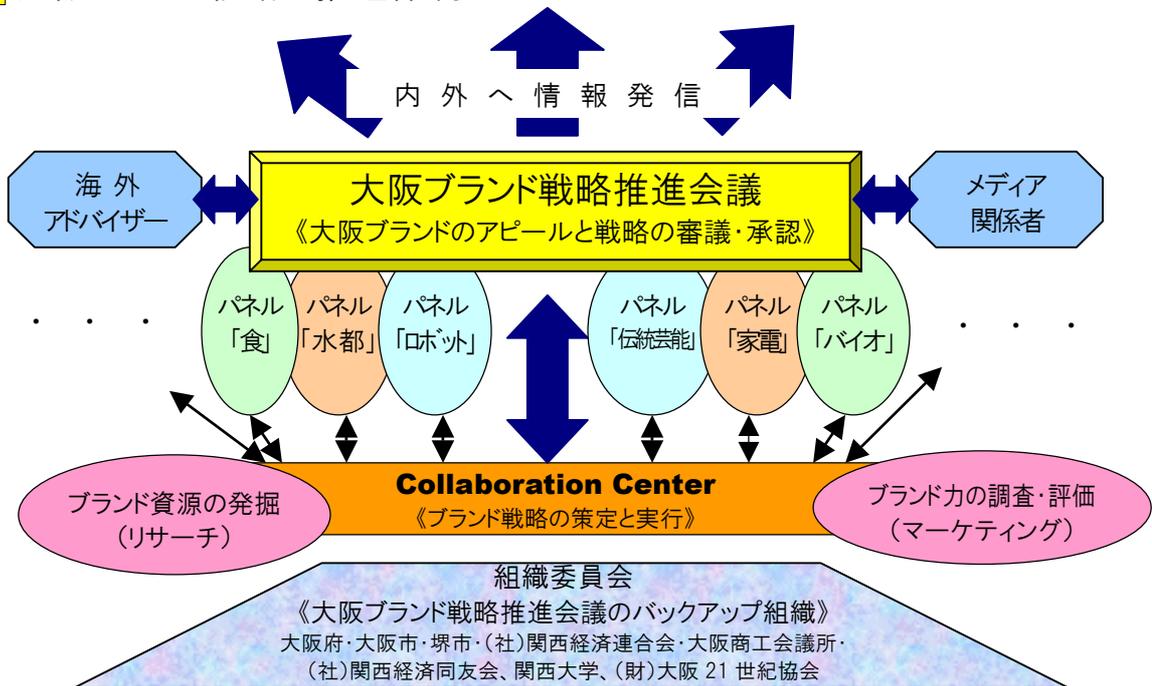
##### ■大阪を磨く

「ブランド資源」について、価値の明確化、新たな魅力の付加等により、その魅力を増大させる活動。

##### ■大阪を語る

「大阪ブランド」を統一的消息として、国内外に向けて戦略的に発信する活動。

## 大阪ブランド戦略の推進体制



## 大阪ブランドコミッティにご協力いただいている方々

### 大阪ブランドコミッティ

#### 【大阪ブランド戦略推進会議】

- 議長 安藤忠雄氏(建築家・東京大学名誉教授)  
コシノヒロコ氏(デザイナー)  
坂田藤十郎氏(歌舞伎俳優)
- 顧問 梅棹忠夫氏(国立民族学博物館顧問)  
大久保昌一氏(大阪大学名誉教授)  
岸本忠三氏(大阪府特別顧問)  
宮原秀夫氏(大阪大学総長)
- 委員 専門家、有識者、文化人など約100名

#### 【コラボレーションセンター】

- チーフ 堀井良殷氏((財)大阪 21 世紀協会理事長)

#### 【組織委員会】

- 委員長: 熊谷信昭氏((財)大阪 21 世紀協会会長)
- 委員: 太田房江氏(大阪府知事)  
關 淳一氏(大阪市長)  
木原敬介氏(堺市長)  
河田悌一氏(関西大学学長)  
秋山喜久氏((社)関西経済連合会会長)  
野村明雄氏(大阪商工会議所会頭)  
寺田千代乃氏((社)関西経済同友会特別幹事)

発行：大阪ブランドコミッティ

〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階

(財)大阪 21 世紀協会内

TEL.06-6920-5196 FAX.06-6942-5945

E-mail : info@osaka-brand.jp

ホームページ「大阪ブランド情報局」 <http://www.osaka-brand.jp>